

# 「メタバイオグラフィー」の二類型

—— A・J・A・シモンズ『コルヴォーを求めて』と  
ニコラス・A・ルプケ『アレクサンダー・フォン・フンボルト伝』——<sup>1)</sup>

星 久美子

## はじめに

「メタバイオグラフィー」は、『オックスフォード英語辞典』(*Oxford English Dictionary*)の最新版(2009)にも『ライフ・ライティング事典』(*Encyclopedia of Life Writing* 2001)にも記載がない新しい用語である。この用語の初出は、エドワード・ソーンドース(Edward Saunders)によると、1966年のハリー・ハルトゥーニアン(Harry Haroontunian)による書評まで遡れるようだが、その出現頻度が増すのは2000年を超えたあたりからである。2003年11月21日号の『タイムズ文芸付録』(*Times Literary Supplement*)に掲載されているパトリシア・ファラ(Patricia Fara)の『ニュートン伝』(*Newton: The Making of Genius* 2002)に関する書評でこの伝記を「メタバイオグラフィー」と称しているのを皮切りに、2004年に創刊された学術誌『ライフ・ライティング』(*Life Writing*)の「編集記」では「『メタバイオグラフィー』と呼ばれる新しいカテゴリーの誕生」を宣言している(xii)。2005年には、後述するニコラス・A・ルプケ(Nicolaas A. Rupke)が『フンボルト伝』(*Alexander von Humboldt: A Metabiography*)に「メタバイオグラフィー」という副題を付けて出版する。また、同年、「フィクションのメタバイオグラフィーとメタオートバイオグラフィー」('Fictional Metabiographies and Metaautobiographies')と題された論文が収録された『文学における自己言及性』(*Self-Reflexivity in Literature*)という論文集が出版されている。このように見てくると、21世紀に入ってから、「メタバイオグラフィー」をめぐる動きが活発となっている

ことは明らかだ。これは、学際的なライフ・ライティング研究の広がり軌を一にしている。

問題は、この用語がまったく異なる、複数の伝記形式を内包していることである。この点について、ソーンドースは次のように指摘している——「メタバイオグラフィーという用語は、フィクションであれ、ノンフィクションであれ、ライフ・ライティングに対するさまざまなジャンル批評的あるいは自意識的な取り組み方を意味するために使われてきた」(325頁)。その多様な取り組み方の中から、ソーンドースはとくに「メタバイオグラフィー」の二類型に着目している。ひとつは「伝記対象の人生の物語を再構築する『探求』を語る伝記」(325頁)、もうひとつは「証拠よりも身近であるところの伝記に関する神話を脱構築する作品」(235–26頁)と位置づけ、マイケル・ベントン(Michael Benton)の言葉を借りて、それぞれ「推測的伝記」(*inferential biography*)と「伝記/神話」(*biomythography*)と名付けている(326頁)。ピエール・エリ・モノ(Pierre-Héli Monot)もまた、「メタバイオグラフィー」の二類型に言及している——すなわち、「ジャンルとしての伝記の言説、実践、および語源に批判的に向き合う伝記」(660頁)と「同一人物について書かれた他の伝記について議論・評価する伝記」(660頁)である。興味深いことに、ソーンドースとモノは同じ二類型を別の表現で言い換えているのであり、本稿では、前者を〈伝記を超える伝記〉、後者を〈伝記についての伝記〉と呼ぶことにする。

〈伝記を超える伝記〉に関しては、前出の「フィクションのメタバイオグラフィーとメタオートバイオグラフィー」が参考になる。その著者であ

るアンスガー・ニュニング (Ansgar Nünning) は、ピーター・アクロイド (Peter Ackroyd) の『チャタートン』(Chatterton 1987)、ジュリアン・バーンズ (Julian Barnes) の『フロベールの鸚鵡』(Flaubert's Parrot 1984)、A・S・バイアット (A. S. Byatt) の『伝記作家の物語』(The Biographer's Tale 2000) を「フィクションのメタバイオグラフィー」(‘fictional metabiography’) と称し、その四つの特徴——「ファクト (事実) とフィクション (架空) の境界を横断する」、「ジャンル区分を曖昧にする」、「伝記対象よりも伝記作家について多く露呈する」、「自己言及性の程度が増大している」(195-96頁) ——を明らかにしている。

ニュニングはポストモダンの時代に書かれた小説に着目しているが、この種の「メタバイオグラフィー」の起源は、ソーンダースも示唆しているように、1934年に出版されたA・J・A・シモンズの『コルヴォーを求めて』(A. J. A. Symons, *The Quest for Corvo*) まで遡ることができる。というのも、この伝記作品は、ニュニングが挙げた四つの特徴のすべてを兼ね備えており、とくに伝記を書いていく過程を明らかにする伝記という自己言及的な側面が顕著であるからである。この側面はニュニングが考察した上記三作にも見られる上、それ以外にもバイアットの『抱擁』(Possession 1990) やジェフ・ダイヤー (Geoff Dyer) の『怒りに任せて：D・H・ロレンスとの格闘』(Out of Sheer Rage: Wrestling with D. H. Lawrence 1997) にも見出せる。シモンズの『コルヴォーを求めて』がこの種の「メタバイオグラフィー」の起源としてとくに注目に値するのは、この作品の副題「伝記における実験」(‘An Experiment in Biography’) が示唆しているように、従来の伝記手法を超えようという著者の自意識的な試みであり、実際に新しい伝記形式が模索されている点である。

一方、科学史や芸術史の分野では、〈伝記を超える伝記〉とは異なる「メタバイオグラフィー」が発達している。前述の通り、2005年に出版されたニコラス・A・ルプケの『アレクサンダー・フォン・フンボルト伝』は、その副題が「メタバイオグラフィー」となっている。これは、いわば

〈伝記についての伝記〉と呼びうるような種類の伝記である。たとえば、科学史の分野では、ヘンリー・ゲルラック (Henry Guerlac) の「ラヴォワジエと伝記作家」(‘Lavoisier and His Biographers’ 1954)、ラルフ・コルプ (Ralph Colp, Jr.) の「チャールズ・ダーウインをめぐる過去と未来の伝記」(‘Charles Darwin’s Past and Future Biographies’ 1989)、ヤン・サップ (Jan Sapp) の「グレゴール・メンデルの9つの人生」(1990)、ジェイムズ・ムア (James Moore) の『ダーウイン伝説』(The Darwin Legend 1994)、ルパート・ホール (A. Rupert Hall) の『18世紀の視点から見たアイザック・ニュートン』(Isaac Newton: Eighteenth-Century Perspectives 1999)、パトリシア・ファラの『ニュートン伝』(2002)、芸術史の分野では、デイヴィッド・デニス (David Dennis) の『ドイツ政治とベートーベン』(Beethoven in German Politics 1996)、文学の分野でもルカスタ・ミラー (Lucasta Miller) の『ブロンテ神話』(The Brontë Myth 2001) などが、「メタバイオグラフィー」という用語は使われていないものの、ルプケの『フンボルト伝』に類する「メタバイオグラフィー」と考えられる。

本稿では、最初に、これら二種類の「メタバイオグラフィー」のうち、「伝記を超える伝記」の起源が20世紀初頭のモダニズム期、とくに「新しい伝記」(New Biography) を志向する動きと関連があることを論証する。その後、その代表的作品としてシモンズの『コルヴォーを求めて』を詳しく考察し、〈伝記を超える伝記〉としての「メタバイオグラフィー」の特徴を明らかにする。次に、「メタバイオグラフィー」のもうひとつの種類である「伝記についての伝記」を代表する作品としてルプケの『フンボルト伝』における伝記手法を考察し、その特徴を明らかにする。最後に、二種類の「メタバイオグラフィー」、すなわち〈伝記を超える伝記〉と〈伝記についての伝記〉を比較・検討することで、「メタバイオグラフィー」という伝記形式が人生および人間をどう語るかという根源的な問題と深く結びついたライフ・ライティングの新しいあり方であることを示したい。

## 1. 20世紀初頭の「新しい伝記」を志向する動き

20世紀初頭の「新しい伝記」を志向する動きは、リットン・ストレイチャー (Lytton Strachey) から始まった。ストレイチャーは、『ヴィクトリア朝偉人伝』(*Eminent Victorians* 1918) の「はじめに」で次のように述べている。

適切な簡潔さを保つこと。つまり、余分なものはすべて排除し、重要なものは何も排除しない簡潔さを保つこと。間違いなく、これが伝記作家の第一の義務である。第二の義務は、これも間違いなく、伝記作家自身の精神の自由を保つこと。伝記作家の仕事は故人を賛美することではない。伝記作家がなすべきことは、主題となる人物に関する事実を、自分の理解に従って明らかにすることであり、これこそ私がこの本でめざしたことである。(中野康司訳)

富士川義之によると、ここにはストレイチャーの「ヴィクトリア朝の分厚い伝記への不満と、自分が目指す伝記文学への野心的な思い」(61頁)が吐露されている。なかでも、「適切な簡潔さを保つこと」、「伝記作家自身の精神の自由を保つこと」、「自分の理解に従って明らかにすること」は、ストレイチャー以前の伝記と決定的に異なる点として重要である。

このようなストレイチャーの伝記叙述に対する基本的な方針、あるいは『ヴィクトリア朝偉人伝』や続く『ヴィクトリア女王』(*Queen Victoria* 1921)における実践は、ハロルド・ニコルソン (Harold Nicolson) やヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) など、同じブルームズベリー・グループに属する一部の知識人には評価されたものの、一般的な評価は低かったようだ。たとえば、オズバート・バーデット (Osbert Burdett) は、1929年に行った「伝記における実験」(‘Experiment in Biography’) と題する講演で、アイロニーを特徴とするストレイチャーの伝記手法を「誰の共感も得られない」し、「真実や人物描写を

主たる目的としない理論に支配されている」と酷評している (168–69頁)。

シモンズは、ブルームズベリー・グループの一員ではないが、ストレイチャーを高く評価している点で注目に値する。1929年に行われた講演「伝記の伝統」(‘Tradition in Biography’)の中で、シモンズはストレイチャーが「未来の伝記作家の先駆け」(159頁)となる可能性を指摘している。この講演で、シモンズは従来からの伝記と未来の、理想的な伝記を比較しているのだが、彼の考える未来の、理想的な伝記の要素のいくつかがストレイチャーの考えと一致しているのは興味深い。ストレイチャーの「適切な簡潔さ」はシモンズでは「適切な長さ」あるいは「簡潔さ」(157頁)、「伝記作家自身の精神の自由を保つこと」は「道徳的判断から自由であること」(158頁)、「自分の理解に従って明らかにすること」は「著者の理解」(153頁)の言い換えと言ってもよいだろう。

しかしながら、ここで注目すべきはシモンズがストレイチャーと異なる点、ストレイチャーを超える点はどこかということ、それは「医学・神経科学の知識」(154頁)、「自意識的な選択」(153頁)、「面白さ／美の法則」(155頁)、「語りの／効果的な順序」(156頁)の四点となる。「医学・神経科学の知識」は、伝記対象であるフレデリック・ウィリアム・ロルフ (コルヴォー男爵) (Frederick William Rolfe, or Baron Corvo) という人物を理解する際に使われている。たとえば、ロルフは人と親しくなるとは喧嘩別れをすることを繰り返すのだが、シモンズはその理由を「誇大妄想と精神的うぬぼれ」(122頁)、あるいは「特殊な神経症」(158頁)によるものと分析し、ロルフの人生における失敗の原因を「偏執狂」(220頁)に求めている。「自意識的な選択」はソーンドースも「メタバイオグラフィー」の一義的な特徴として挙げているが、これ以外の二点——「面白さ／美の法則」、および「語りの／効果的な順序」——も、以下で考察するように、メタ性と関連がある。以下では、これらを冒頭で言及したニュニグが「メタバイオグラフィー」の特徴として挙げる四点——「フィクションとファクトの境界横

断」,「ジャンル区分の曖昧性」,「伝記対象よりも伝記作家に関する露呈の多さ」,および「自己言及性」—と照らし合わせながら『コルヴォーを求めて』を考察し,この作品がストレイチャーらモダニストの目指した「新しい伝記」を超える「メタバイオグラフィー」であることを示す。

## 2. 〈伝記を超える伝記〉——A・J・A・シモンズの『コルヴォーを求めて』

シモンズの『コルヴォーを求めて』の伝記対象であるフレデリック・ウィリアム・ロルフ(コルヴォー男爵)は,1860年にロンドンに生まれ,1913年にヴェネツィアで死亡した実在の作家である。補助教員を経て,カトリック司祭を目指す。挫折,その後は画家として活動していたこともある。自ら「コルヴォー男爵」と名乗ったことから,彼の特異な性格の一端が伺える。作家としての代表作は,1904年に出版された『ハドリアヌス七世』(*Hadrian the Seventh*)である。この作品は,カトリック司祭になりたかったロルフ自身の願望を充足させているかのように,一度はカトリック司祭への道を閉ざされた主人公がさまざまな苦難や逆境にもかかわらず,予期せずしてローマ教皇に選定され,「ハドリアヌス七世」として自分の理想を実現させていく。最後は,若いときのスキャンダルを種に脅迫された挙げ句,路上で銃弾に倒れる。このような主人公の「人間離れた様」(127頁),奇想天外な生涯に加え,ギリシア語とラテン語を組み合わせた造語の多用などが特徴的である。この作品は,D・H・ロレンス(D. H. Lawrence),グレアム・グリーン(Graham Greene),W・H・オーデン(W. H. Auden)など,一部の同時代人から高く評価された一方,一般にはほとんど知られることはなかった。日本では河村錠一郎の翻訳および研究がある。

『コルヴォーを求めて』を再評価するにあたって,なによりも読んでいて面白いことを強調したい。この「面白さ」については,A・S・バイアットがお墨付きを与えている。バイアットは『コルヴォーを求めて』の「序文」で,この作品を十代の頃に夢中になって読んだと述懐している。そ

して,その「面白さ」の理由を,シモンズ自身がこの作品を書くに当たって「探偵小説の形式」(*Corvo, Introduction ix-x*)を想定していた事実を求める。実際,『コルヴォーを求めて』の読者は,あたかも「探偵小説」を読んでいるかのような感覚に陥る。そして,伝記的事実を読んでいるのか,フィクション読んでいるのか,戸惑いを感じるかもしれない。これは,ニュニングが「メタバイオグラフィ」の特徴として挙げる「ファクトとフィクションの境界横断」および「ジャンル区分の曖昧性」に相当するものだ。

『コルヴォーを求めて』の「探偵小説」のような「面白さ」は,「語りの順序」に負うところが大きい。『コルヴォーを求めて』は,伝統的な伝記のように伝記対象が生まれてから死ぬまでの人生を年代順に辿るのではなく,伝記作者であるシモンズが伝記対象であるフレデリック・ロルフが書いた『ハドリアヌス七世』に魅了され,この作家についてもっと知りたいという欲求に駆られて資料収集に奔走し,徐々に真相に迫っていく過程が順を追ってつまびらかに描かれていく。以下,シモンズがロルフについて知ってから探求を始めるまでを示す。

- (1) 1925年に友人のクリストファー・ミラード(Christopher Millard)からフレデリック・ロルフの『ハドリアヌス七世』を借りて読み,そこに展開される物語,文体,主人公ハドリアヌスのエキセントリックな人間像に強い印象を受ける。
- (2) ミラードより1909年から10年の間にロルフがヴェネツィアから友人に宛てた,お金を無心する手紙を借りて読み,この時期,彼がヴェネツィアにいて,経済的にひどく困窮していた事実を知る。
- (3) ミラードの手書きのメモを見て,1913年にロルフが死亡した事実を知る。
- (4) (ミラードから借りた)1913年10月29日付の『スター紙』(*The Star*)に掲載された死亡記事により,イタリアの伯爵夫人から「男爵」という称号を授けられた事実,『ト

ト物語』(*Stories Told Me*) を執筆している事実を知る。

- (5) (ミラードから借りた) シェーン・レズリー (Shane Leslie) が『ロンドン・マーキュリー』(*The London Mercury*) に掲載したロルフの伝記を読んで、ロルフの他の作品、『ドン・タルクイーノ』(*Don Tarquinio*)、『ボルジア家の歴史』(*Chronicles of the House of Borgia*)、およびオマル・ハイヤーム (Omar Khayyam) の翻訳を知る。
- (6) (ミラードから借りた) ハリー・ピリ＝ゴードン (Harry Pirie-Gordon) が『タイムズ文芸付録』(*Times Literary Supplement*) の編集者に宛てた手紙で、『放浪者の運命』(*The Weird of the Wanderer*) が1912年に出版されている事実を知る。
- (7) (ミラードから借りた) 『タイムズ紙』(*The Times*) に掲載されたフランク・スウィナートン (Frank Swinnerton) の手紙で、『現代ヴェネツィア物語：全一への希求と追慕』(*A Romance of Modern Venice; or the Desire and Pursuit of the Whole*) を執筆している事実を知る。

この後、シモンズは、こうして知り得た情報を頼りに、シェーン・レズリー、ハリー・ピリ＝ゴードン、およびフランク・スウィナートンらに照会の手紙を送り、ある場合は返信を受け取り、ある場合は直接会いに行くなどして、さらに情報を収集しながら、ロルフの人生を追跡していく。こうした「語りの順序」によって、読者は伝記作家シモンズの体験を追体験しているような臨場感を味わうことになる。

『コルヴォーを求めて』ではまた、伝記作者であるシモンズの率直な疑問や主観的な感想が随所に盛り込まれている。たとえば、シモンズが『ハドリアヌス七世』を読んでいる最中の興奮は以下のように語られる。

二十頁も読まないうちに、私の好奇心はミラードがこの本を推薦してくれたことへの感謝の気

持ちが変わった。自分を変えてしまうような新しい経験をしたときに感じる、心身が内側から揺さぶられるような感覚を味わったのである。読み終えるやいなや、もう一度最初から最後まで読み通したのだが、私の第一印象がさらに強まったことを感じた。(6頁：引用は拙訳による)

読者は、シモンズのこの興奮を共有して伝記対象への好奇心を強くすることになる。さらに、『ハドリアヌス七世』を二回読んだ後、次から次へと疑問が湧いてくる——「まだ生きているのか？ 死んでいるのか？ 他に著書はあるのか？ なぜ自分はこれまで『ハドリアヌス七世』のような作品を書くほどの人物について耳にしたことがなかったのか？」(14頁)。

翌日、シモンズは満を持してミラードに会いに行くのだが、そこで彼からロルフが書いた23通の長文の手紙と2通の電報を収めた1冊の本を受け取り、「好奇心で半ば窒息しそう」(15頁)になりながら帰路につく。そして、それらをたった二時間で読了、さらなる疑問が彼から睡眠を奪う。

この悲劇的な没落は、どうして、どのように起こったのか？『ハドリアヌス七世』と書簡集にはある人生の始まりと終わりがある(と私は思った)。その間にどのような物語があったのか？知りたいという欲求が私の中で膨れ上がって、起き上がってミラードに今から行くと電話しそうになった。が、きっとミラードに眠そうな声で呪われると思い、留まった。翌朝、私は出かけていった。(17頁)

膨れ上がる好奇心を抑えることができず、真夜中にミラードに電話をかけそうになるがなんとか思い留まるというこのエピソードは、読者の笑いを誘うかもしれない。また、シモンズは率直な疑問や主観的な感想を示すだけでなく、照会や面会を行う情報提供者と自分との関係を詳しく述べるなど、自分について語ることが多く、結果として

読者は、伝記対象と同時に、伝記作家についても多くを知ることになる。これも、ニュニングが指摘する「メタバイオグラフィー」の特徴である。

もちろん、伝統的な伝記の作者も上述のような情報入手の方法を取っているだろうし、知的好奇心による高揚を味わっているはずだ。ただ、カーテンの後ろに隠しているだけである。しかしながら、『コルヴォーを求めて』では、従来は隠していた部分を堂々と舞台上げて披露している点に特色がある。これは、伝記を書いていく過程を明らかにしているという意味で、ニュニングが言うところの「自己言及性」を表していると言えるだろう。

これが顕著に見られるのは、シモンズが伝記方法について説明する箇所である。1895年から1897年の間に、ロルフが画家としてウェールズのホリウェルで「聖職者の垂れ幕」(82頁)を作成していたことを明らかにした後、シモンズは突如として「注」を挿入する。

ここまでのところ、私は読者の前に(調査を分析して集約したものではなく)探求それ自体の説明を提示してきた。ロルフのような特異な人間に関しては、この例外的な方法が適切であると信じている。真実はさまざまな形を取って現れる。私の調査は、光と闇が織りなす劇的な変化の中にコルヴォー男爵を発見してきたが、その変化こそが一人の人間に関する説明よりも真実として価値があると確信している。(中略)しかしながら、私の語りがいま到達しているロルフの人生のこの時期において、この方法は、当面の間だが、役に立たなくなった。(中略)続く章では、私の調査の過程を述べずに、さまざまな情報源から入手した証言や情報を結び合わせ、首尾一貫した年代順の説明を行っていく。(105頁)

たしかに、この期間のロルフの動向については情報源が非常に多岐にわたり、追跡が困難を極めるのだが、こうして内幕を明かしてしまうのはやや拍子抜けであると同時に、伝記の書き方という観

点からすれば自己言及的であると言える。

ロルフは1908年にヴェネツィアに行くのだが、そこから1910年までは情報源が不明確な場合が多い。それについても、シモンズが説明を加える。

読者は、おそらく、どうやって私がヴェネツィアにおけるロルフの生活に関する詳細な情報を入手したのか、疑問に思うことだろう。本書で言及しているドーキンズ教授、ヴァン・ソマレン夫人、ラッグ司祭などが存命であると言えば十分な答えになるはずだ。多少の困難はあったが、彼らをすべて探しだし、それぞれからパズルの断片を入手したのである。前の二つの章においては、それらを私の力の及ぶかぎりに組み立てたのである。(234頁)

もうひとつ、『コルヴォーを求めて』における伝記を書いていく過程を明らかにするエピソードは、ロルフの死をめぐるものである。ロルフは1913年にヴェネツィアで死亡するのだが、その死に関して「自殺」という情報が早い段階で得られるものの、その後、実は「心臓疾患」が死因であったということがわかる。ところが、前者の情報は訂正されることなく、新しい情報に置き換えられているのだ。つまり、矛盾・齟齬を解消せず、ありのままに提示してしまっているのである。もちろん、従来の伝統的な伝記の執筆過程でも、ひとつの出来事について二つ以上の異なる情報が存在することはあったはずで、その場合にはどちらか一方を選択し、決定的な真実として提示していることが多い。『コルヴォーを求めて』では、選択以前の錯綜とした状況をありのままに表しているという点で、伝記執筆について自己言及的であると言えるだろう。

### 3. 〈伝記についての伝記〉——ニコラス・A・ルプケ『アレクサンダー・フォン・フンボルト伝』

次に、シモンズの『コルヴォーを求めて』に代表される〈伝記を超える伝記〉とは異なる「メタ

バイオグラフィー」の類型として、ニコラス・A・ルプケの『アレクサンダー・フォン・フンボルト伝：メタバイオグラフィー』を考察する。アレクサンダー・フォン・フンボルトは、1769年ベルリン生まれの博物学者・地質学者であり、「近代地理学の祖」と呼ばれる。彼はまた探検家と評されることもあるが、これは彼の博物学・地質学が探検、すなわち実地調査に基づいているからである。とくに重要なのは、1799年から1804年に行われた南北アメリカ探検旅行であり、この旅行で得た成果は、晩年、全五巻からなる『コスモス』(Kosmos 1845-62)にまとめられ、自然地理学の基本概念を築いたと言われる。1859年にベルリンで亡くなる。

このフンボルトに関する伝記を執筆するに際してルプケが採用した方法は、シモンズのそれとも、従来のそれとも異なっている。すなわち、自伝、書簡、日記、回顧録などの一次資料に依拠する手法ではなく、フンボルトがまだ存命中の1848年から現在までのドイツの歴史を政治的・社会的傾向から五つの期間に分類し、それぞれの期間に書かれた伝記（二次資料）でフンボルトがどのように表象されているかを分析するという手法である。

ルプケによると、第一期に書かれた初期のフンボルト伝には二つの側面が顕著に見られるという。ひとつは『「自由と国家統一」側の自由民主主義者』(Rpt. in Rupke 30頁)としてのフンボルトであり、もうひとつは「ドイツ民族の教育者」(30頁)としてのフンボルトである。この背景について、ルプケは、当時の社会ではフンボルトを三月革命の英雄とみなす気運が見られたものの、それには「フンボルトのフランスびいき」と「保守反動的なプロシア王室への近さ」(30頁)という障害があったため、初期の伝記作家は、一般向けという性質を有し、ドイツ語で執筆された『コスモス』を中心にせざるを得なかったと説明する。フンボルトの死後、1860年にカール・アウグスト・ルートヴィッヒ・フィリップ・ファルンハーゲン・フォン・エンゼ(Karl August Ludwig Philipp Varnhagen von Ense)との書簡集が出版さ

れると、そこに記されたフンボルトの王権への鋭い批判と革命への強い共感により、『「自由と国家統一」側の自由民主主義者』という像は揺るぎないものとなる。一方で、「ドイツ民族の教育者」としてのフンボルトは、ドイツ文学の担い手として、ゲーテ(Goethe)やシラー(Schiller)と共に高く評価され続けた。

第二期は、ドイツ帝国成立から第一次世界大戦を経てヴァイマル共和国崩壊に至る期間である。この期間では、ビスマルクの台頭と反比例するように、第一期に示したフンボルトの政治的重要性は失われるが、「独自の文化を持つ国家としてのドイツ」(57頁)と密接に結びついたフンボルト像が示されていく。ここでは三つの機関・組織がとくに重要な役割を果たした。一元論同盟はダーウィンに並ぶ科学者として、ライプツィヒ大学はドイツ古典主義の代表として、1920年代の外務機関では外国文化政策的観点からフンボルトに注目し、それぞれの観点からフンボルトの業績を喧伝した。

第三期、ヴァイマル共和国後に成立した第三帝国の期間では、国家社会主義ドイツ労働者党(ナチ党)が勢力を強める中で、フンボルトをユダヤ人に対する「アーリア人至上主義」を体現する存在、「ファシスト・フンボルト」として位置づける傾向が見られる(81頁)。たとえば、国家社会主義ドイツ労働者党の理論的指導者であり、ヒトラーの側近だったアルフレート・ローゼンベルク(Alfred Rosenberg)は、1937年の演説の中で、フンボルトとエルンスト・ヘッケル(Ernst Haeckel)を「国家社会主義の大義の支持者とみなされるべきドイツの偉大な科学者二人」とし、彼らとの「内的つながりや心の準備は今日でも機能していると感じている」と述べた(82頁)。また、党の機関誌『意志の力』(Wille und Macht)などでドイツの優位性を示すためにフンボルトをプロパガンダに利用した(82頁)。これを可能にした背景には、第一期から続いていたフンボルトのイメージであるところの「ドイツ民族の教育者」における「民族」を「人種」にずらしやすかったこと、また彼の優生学的関心がナチの生物学

的思考に合致したという理由が考えられる (81頁)。

第四期は、第二次世界大戦後の東西ドイツの分裂から統一に至る期間である。この期間のフンボルト受容について、ルプケは、東ドイツ・西ドイツともに非ナチ化を目指しながら、いかに自らの陣営の主義に合う形でフンボルトを利用しているかを考察している。東ドイツでは、反ファシスト、マルクス・レーニン主義者として解釈し直された。東ドイツの動向として顕著なのは、「フンボルト研究がマルクス主義的観点からのドイツ、および世界の歴史の見直し」と軌を一にしている点である (106頁)。1959年にはフンボルト逝去100周年、69年にはフンボルト生誕100周年を迎えるが、これらが東ドイツ建国10周年、20周年と重なったこともこの動きに拍車を掛けた。また1984年はフンボルト逝去125周年を迎えた。この期間、ベルリンのアカデミーはフンボルト研究を飛躍的に前進させた。アカデミー以外にもフンボルト研究は盛んであった。1949年にフリードリヒ・ヴィルヘルム大学がフンボルト大学に改名、ライプツィヒにあるカール・マルクス大学にフンボルト研究者が所属、また地質学・地理学に関連する組織、たとえばフライベルクにある炭坑協会や東ドイツ地理学会はその中心にフンボルトを据えた。1956年には、ドイツ社会主義統一党の指導の下、後のフンボルト研究所を設立し、フンボルトの著作、書簡、日記などの編纂に取り掛かった。

一方、西ドイツでは、東ドイツに比べて政治色が薄く、「博学で、非軍事的、非国家主義的なドイツ文化の優れた部分を代表するコスモポリタンな科学者」、「西ドイツの国際慈善大使」としてフンボルトを受容している (141頁)。1959年のフンボルト逝去100周年に際しても、東ドイツとは対照的に、フンボルトの「超国家的価値観を有するロールモデル」として見習おうという姿勢がこの時期に書かれた伝記にも見られる (141頁)。1953年にボンに再設立されたフンボルト財団も、フンボルト研究の推進よりも、「性別、人種、宗教、思想に関係なく、外国籍の若い研究者に奨学

金を与え、ドイツで一定期間研究することにより、彼らの学術研究をより発展させること」を目的としたものである (143頁)。

最後の第五期では、ベルリンの壁崩壊・東西ドイツ統一から現代までに書かれたフンボルト伝が対象となる。ルプケによると、この時期のフンボルトは、西ドイツのフンボルト像を引き継ぎながら、自由市場の拡大・発展と関連づけて「グローバルイゼーションの先駆者」(181頁)、環境主義に着目して「グリーン・フンボルト」(185頁)と表象されることが多い。

このように、ドイツ史上の五つの期間の「フンボルト」表象を分析した結果、それぞれの期間に書かれた伝記に表象された「フンボルト」は「特定の組織と社会政治的文化的産物」(10頁)であるとルプケは結論づけている。

### おわりに

以上、〈伝記を超える伝記〉と〈伝記についての伝記〉というまったくタイプの違う二種類の「メタバイオグラフィー」を考察してきたが、これらに共通する点は、人生、ひいては人間について語ること、すなわち「ライフ・ライティング」への著者による自意識的な取り組みと云っていいだろう。シモンズとルプケが共に「ライフ・ライティング」とはなにかという問題意識を元に執筆活動を行っている点は注目し値する。シモンズが『コルヴォーを求めて』において「語りの／効果的な順序」に拘ったのは、彼の「ライフ・ライティング」に関する見解、つまり「伝記は物語を語ること、人生の物語を語ることである」(‘Tradition in Biography’ 156頁)という見解に基づいていることを指摘しておきたい。また、ルプケは『フンボルト伝』の「はじめに」で、本書の執筆が『「語られる人生」は『生きられた人生』の本質を捕らえることができるのか』(9頁)、「批判的研究や伝記叙述という形式によって、神話の背後にある人間の本質を回復することはできるのか』(9頁)といういくつかの疑問に基づいていることを明かしている。ルプケ自身はこれらの疑問に対する答えを明示してはいないが、『フンボルト伝』で示

し得たものが「特定の組織と社会政治的文化的の産物」であるという彼の結論から、結局のところ「人間の本质」は語り得ないという否定的な解を示唆してはいないだろうか。20世紀初頭に誕生した「メタバイオグラフィー」という新しい伝記形式とその隆盛は、「人生」をどう語るのか、あるいは語り得るのか、すなわち「主体性」をめぐる今日的な問題に挑む「ライフ・ライティング」の模索が具現化したものなのである。

#### 注

1) 本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C：2016–2018年度 課題番号16K02446）の成果の一部である。また、本論文は、2014年5月20日(土)に行われた日本英文学会第86回全国大会（於北海道大学）における発表原稿をもとに、大幅に加筆修正したものである。

#### 参考文献

- Ackroyd, Peter. *Chatterton*. New York: Grove, 1987.
- Barnes, Julian. *Flaubert's Parrot*. 1984. New York: Picador, 2002.
- Besemeres, Mary, and Maureen Perkins. 'Editorial.' *Life Writing* 1 (1) (2004): viii–xii.
- Burdett, Osbert. 'Experiment in Biography.' *Tradition and Experiment in Present-Day Literature: Addresses Delivered at the City Literary Institute*. London: Oxford UP, 1929. 161–78.
- Byatt, A. S. *The Biographer's Tale*. London: Vintage, 2001.
- . *Possession: A Romance*. 1990. London: Vintage, 1991.
- Colp, Ralph. 'Charles Darwin's Past and Future Biographies.' *History of Science* 27 (1989): 167–97.
- Dennis, David B. *Beethoven in German Politics, 1870–1989*. New Haven and London: Yale UP, 1996.
- Dyer, Geoff. *Out of Sheer Rage: Wrestling with D. H. Lawrence*. New York: Picador, 1997.
- Fara, Patricia. *Newton: The Making of Genius*. London: Macmillan, 2002.
- Guerlac, Henry. 'Lavoisier and His Biographers.' *Isis* 45 (1954): 51–62.
- Hall, A. Rupert. *Isaac Newton: Eighteenth-Century Perspectives*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Miller, Lucasta. *The Brontë Myth*. London: Cape, 2001.
- Monot, Pierre-Héli. 'Personal Epistemologies: Historiography, Self-reflexivity and Bios.' *European Review of History—Revue européenne d'histoire* 19 (5) (October 2012): 659–67.
- Moore, James. *The Darwin Legend*. Grand Rapids, Michigan: Baker Books, 1994.
- Nicolson, Harold. *The Development of English Biography*. London: Hogarth, 1968.
- North, John. 'Of apples and analysts,' book review in *Times Literary Supplement* 5252, 21 Nov. 2003: 6–7.
- Nünning, Ansgar. 'Fictional Metabiographies and Metaautobiographies: Towards a Definition, Typology and Analysis of Self-Reflexive Hybrid Metagenres.' *Self-Reflexivity in Literature*. Ed. Werner Huber, Martin Middeke, Hubert Zapf. Würzburg, Germany: Königshausen & Neumann, 2005. 195–209.
- Rupke, Nicolaas A. *Alexander von Humboldt: A Metabiography*. Chicago and London: U of Chicago P, 2008.
- Sapp, Jan. 'The Nine Lives of Gregor Mendel.' *Experimental Inquiries*. Ed. Le Grand and Homer E. Dordrecht: Kluwer, 1990. 137–66.
- Saunders, Edward. 'Defining Metabiography in Historical Perspective: Between Biomyths and Documentary.' *Biography* 38. 3.(Summer 2015): 325–42.
- Strachey, Lytton. *Eminent Victorians*. 1918. Oxford: Oxford UP, 2001. 中野康司訳『ヴィクトリア朝偉人伝』、みすず書房、2008年。
- . *Queen Victoria*. Harmondsworth: Penguin, 1971.
- Symons, A. J. A. *The Quest for Corvo: An Experiment in Biography*. 1934. New York: New York Review Books, 2001. 河村錠一郎訳『コルヴォーを探して』、早川書房、2012年。
- . 'Tradition in Biography.' *Tradition and Experiment*. 149–60.
- Woolf, Virginia. 'The Art of Biography.' *Selected Essays*. Oxford: Oxford UP, 2009. 116–26.
- . 'The New Biography.' *Selected Essays*. 95–101.
- ウルフ・セシル『ヴェネツィアからの誘惑——コルヴォー男爵少年愛書簡』、河村錠一郎訳、白水社、1994年。
- 河村錠一郎『コルヴォー男爵——知られざる世紀末』、小沢書店、1991年。
- 富士川義之「二十世紀イギリスの伝記文学について：ゴスとストレイチー（2015年度立教英米文学会講演会より）」、『英米文学』（立教大学紀要）第77巻、2017年、53–70頁。